

母性看護学実習における学習効果の検討

—分娩見学レポートの分析—

志賀くに子¹⁾ 伊藤 榮子²⁾

The examination of effect on learning in a study of the maternity nursing practice — The analysis of the delivery study report —

Kuniko SHIGA Eiko ITOU

要旨：学生の母性看護学実習における学習効果を検討することは、今後の母性看護学の教育のあり方・教員の指導のあり方についての示唆を得る上で重要であると考え、本学の母性看護学実習において分娩を見学した学生を対象に、質問紙による調査を実施した。それにより得られた結論を以下に示す。

1. 「分娩見学」をすることによって、分娩前の妊娠経過と分娩後の産褥経過（新生児含む）を有機的に結びつけることができ、「母性看護学実習」の成果がより大きくなる。
2. 産婦の看護、特に産痛緩和の援助を通して、産婦と一体になるような母性実習体験をすることで対象の理解も深まり、学習効果が拡大する。
3. 学生は「母児対面」の場に居合わせることで学生自身の母性意識を高める。

キーワード：母性看護学実習、学生、分娩見学、学習効果

Summary : The purpose of this research explained the effect of the thing that a student does a delivery study, and it was to examine it. The result that a student's delivery study report was analyzed and which was examined is shown in the following.

1. A student can understand it by the delivery study ,and he can increase the result of “the maternal nursing study practice” of the pregnancy・puerperium progress.
2. A connection, effect on learning are bigger in deepening parturient woman's understanding than experiencing parturient woman's nursing for the student, too.
3. Student's own maternal consciousness is raised by a student's being in the place of “the mother meets baby” .

Key word : the maternity nursing practice, students, the delivery study, effect on learning

I. はじめに

臨床実習は、これまで学んだ知識、技術、態度を統合する場であり、看護を体験的に学ぶ貴重な学習の機会である。

なかでも母性看護学実習（以下、母性実習とする）は、女性の一生の中で最も劇的な生命の誕生の瞬間にも立ち会い、次代の新しい生命を生み育てる過程に参加する機会になる。

日本赤十字秋田短期大学（以下、本学とする）

の母性実習では、産婦の援助に必要な基礎的技術を学ぶこと、また看護者のあり方を学ぶことを目的に、産婦の援助を通し分娩の見学を行っている。

学生が3週間（135時間）の期間のなかで、しかも産婦の援助を実践できるのは1～2日間という少ない機会のなかで何をどのように学んでいるか、関心をもった。分娩を見学しての感想については、カンファレンスなどで学生に発表させているが、その詳細な学びについては検討していなか

看護学科 1) 講師 2) 教授

本研究は、平成12年度日本赤十字秋田短期大学共同研究費補助金を受けたものである。

った。

そこで、今回は「分娩第2期を見学して（分娩見学後）」のレポート記述内容から、分娩を見学し学び得たことを明らかにし、母性実習指導のあり方について検討したいと考えた。

学生の母性実習における学習効果を検討することは、今後の母性看護学の教育のあり方・教員の指導のあり方についての示唆を得る上で重要であると考えられる。

II. 研究目的

「分娩第2期を見学して」のレポート記述内容から、分娩を見学して学び得た結果を分析する。

III. 研究方法

1. 調査対象：秋田赤十字病院産科病棟で母性看護学実習を行い、分娩見学（初回のみ）ができた日本赤十字秋田短期大学看護学科学生60名
2. 調査期間：平成11年1月～12月
3. 調査方法：
 - 1) 母性看護学実習において分娩を見学した学生に配布。筆者らが作成した質問紙による留め置き調査。対象者には、調査の目的を説明し了解を得たうえで記名式とする。
 - 2) 調査内容：分娩見学後、設定項目、以下の(1)、(2)、(3)に応じ感じたことについて自由記述とする。
 - (1) 分娩を見学し最も印象に強く感じたことは何か。
 - (2) 産婦を受け持ち看護を実践して考えたことは何か。
 - (3) 母と新生児の様子をみて感じたことは何か。
4. 集計・分析方法：
 - 1) 自由記述の内容分析は、記述内容が単一要素であるようにセンテンスを区切り、それを1件とした。これを意味内容が類似すると判断したものをカテゴリー化し命名した。分析については筆者らで検討し、信頼性の確保に努めた。
 - 2) 設定項目に応じた自由記述内容のセンテンス件数およびそれらをカテゴリー化したものを単純集計した。

IV. 結果

1. 回答者数60人。
2. 分娩を見学し最も印象に強く感じたこと
分娩を見学し最も強く印象に感じたことの有効回答数60人の自由記述件数は186件であった。
自由記述件数186件の記述内容の分類とその具体的な記述内容の主なものを表1に示した。
記述内容を意味内容毎にまとめると「感動」「スタッフの関わり」「自分への振り返り」「学んだこと」「看護者の役割」「母への思い」「母の強さ」「分娩第2期（娩出）」「娩出された児」「出産」「自分の将来」の11の項目となった。
最も多かったのは「感動」が40件（21.5%）、次いで「スタッフの関わり」では33件（17.7%）、「自分への振り返り」30件（16.1%）、「学んだこと」は26件（13.9%）、「看護者の役割」12件（6.5%）であった（重複回答）。
カテゴリー毎の具体的な主な記載内容は以下の通りである。
「感動」では、分娩そのものに対して驚き、感動したことを述べており、具体的な記述内容としては「陣痛や分娩などの経過は初めてみたので驚いた」、「何もかもが想像していたこと以上だったので驚きと感動でいっぱいだった」や「新しい生命の誕生はすごいと思った」などがあげられていた。
「スタッフの関わり」では、産婦の援助にかかわる助産婦、看護婦、医師らが実践していたさまざまな援助を目の当たりにして感じたことを述べており、具体的な記述内容としては「産婦とその場に居合わせた人、皆で呼吸法を一緒に行い、支えている様子だった」、「介助している助産婦、看護婦、医師などの言葉かけがあたたかかった」や「助産婦のしっかりした口調かつやさしい配慮が印象的だった」などがあげられていた。
「自分への振り返り」では、学生が産婦を受け持ち看護を実践したなかで感じたことを述べており、具体的な記述内容としては「産婦の手を握ったり風をおくることしかできなかった」、「そばにいても何もできなくてとても情けなかった」や「そばにいて手を握ることなどで安心感を少しでも与えることで精一杯だった」などをあげていた。
「学んだこと」では、学生が産婦を受け持ち看護を実践し、できた、わかったことについて述べており、具体的な記述内容としては、「本やビデオでは学習できないことを学ぶことができた」、

表1 分娩を見学し最も印象に強く感じたこと

n=186

項目	件数(%)	具体的な記述内容
1. 感動	40 (21.5)	「陣痛や分娩などの経過は初めてみたので驚いた」 「何もかもが想像していたこと以上だったので驚きと感動でいっぱいだった」 「娩出した際、そこにいる全ての人の顔がゆるんでとても感動的だった」 「1つの生命が誕生する瞬間を見ることができすごく感動した」 「つい先まで痛みで苦しんでいた産婦の顔が、児娩出後、声が聞こえたときとたんに優しい母親の顔になったのを見て感動した」 「新しい生命の誕生はすごいと思った」 「あまりにも強烈で心の深い所をつき動かされたような気がしています」など
2. スタッフの関わり	33 (17.7)	「産婦とその場に居合わせた人、皆で呼吸法を一緒に行い、支えている様子だった」 「助産婦、看護婦、医師の励ましが産婦にとって最も頼りになるのではないかと感じた」 「介助している助産婦、看護婦、医師などの言葉かけがあたたかかった」 「助産婦のしっかりとした口調かつやさしい配慮が印象的だった」 「それぞれの職種の人々がそれぞれの役割を果たしていることに気づいた」 「出産時の医療者側のかかわり方が強く印象に残った」 「出産は危険と隣り合わせであり、産婦以下スタッフ全員の協力があるから安全で安楽に、胎児が娩出されるのだと強く感じた」など
3. 自分への振り返り	30 (16.1)	「マッサージすることで呼吸法のリズムを、タッチングによって安心感を与えられた」 「自分の知識、感性が求められる」 「産婦の手を握ったり風をおくことしかできなかった」 「そばにいても何もできなくてとても情けなかった」 「呼吸法を行うことで陣痛を少しでも和らげることができることがわかった」 「そばにいて手を握ることなどで安心感を少しでも与えることで精一杯だった」 「常に声をかけていくことで産婦はお産に集中させることができる」など
4. 学んだこと	26 (13.9)	「人によって経過が違い臨機応変な対処が医療者側に求められることを学んだ」 「本やビデオでは学習できないことを学ぶことができた」 「児の泣き声や動きからひしひしと生命の誕生を感じることができた」 「親と自分のつながりなどを再認識できたと思う」 「夫婦で児の誕生を待っていることを感じることもできた」 「児が母親にとってどんなに重要な存在であるかがわかった」など
5. 看護者の役割	12 (6.5)	「産婦が満足感や達成感を得られるような出産ができるよう援助していくこと」 「産痛に苦しむ産婦への援助が大切である」 「医師にはできない大切でとても大きな技術を看護婦は提供できる」 「不安や疼痛でいっぱいの産婦にとって看護婦の存在はものすごく大きいと思う」 「看護者として記録も重要である」など
6. 母への思い	10 (5.4)	「母親への感謝の気持ちでいっぱいだった」 「今の自分がいるのは親がいたからだ感謝しなければと思った」 「母親に心から私を産んでくれてありがとうと思った」 「母親が自分を生んでくれたことに感謝する気持ちでいっぱいでした」など
7. 母の強さ	10 (5.4)	「母（女性）ってすごいな、強いなと感じた」 「母体の強さを強く感じた」 「大仕事を成しとげられる女性は強いと思った」 「こんなに苦しんでも2人、3人と子供を生んでいることに母親の強さを感じた」など
8. 分娩第2期（娩出）	9 (4.8)	「児が飛び出てきたことにとっても驚いた」 「児が娩出する瞬間を見てとても感動した」 「胎児の頭が産道から外に出ると体がその後にとってもスムーズに出てきたことに驚きを感じた」 「鉗子分娩だったためかあつけなく感じた」など
9. 娩出された児	8 (4.3)	「小さな命だが生命力の強さを感じた」 「児は外へ出た瞬間から自分で呼吸して生きていくことのすばらしさを感じた」 「児がやっと自分で呼吸をして生きていくんだなと誕生のすばらしさを感じた」など
10. 出産	4 (2.2)	「出産のすばらしさを強く感じた」 「出産がこんなに感動を与えるものとは思わなかった」 「出産は女の仕事というより、その児が生命を宿したときの性行為に近い、温かく神聖な感じがした」など
11. 自分の将来	4 (2.2)	「自分も子供を産んでみたいと思うが分娩中の苦しみをみているとどうかと思った」 「分娩後の児に直面している家族をみて自分も母親になりたいと思った」 「絶対に自分も幸せに妊娠、分娩したい」など

(単位：件数、複数回答)

「親と自分のつながりなどを再認識できたと思う」や「兄が母親にとってどんなに重要な存在であるかがわかった」などがあげられていた。

「看護者の役割」では、産婦の看護実践を通して看護者の役割にはどのようなことがあるか感じたことを述べ、また具体的な記述内容としては「産婦が満足感や達成感を得られるような出産ができるよう援助していくこと」や「産痛に苦しむ産婦への援助が大切である」などがあげられていた。

「母への思い」では、「母親への感謝の気持ちでいっぱいだった」や「母親が自分を生んでくれたことに感謝する気持ちでいっぱいでした」などがあげられていた。

「母の強さ」では、「母体の強さを強く感じた」や「大仕事を成しとげられる女性は強いと思った」などがあげられていた。

「分娩第2期（娩出）」では、「胎児が娩出」するその時に感じたことが述べられており、具体的な記述内容としては「兄が娩出する瞬間を見てとても驚いた」や「鉗子分娩だったためあっけなく感じた」などがあげられていた。

「娩出された兄」では、「小さい命だが生命力の強さを感じた」や「兄がやっと自分で呼吸をして生きていくんだと誕生のすばらしさを感じた」などがあげられていた。

「出産」では、出産という表現を用いて感じたことについて述べており、具体的な記述内容としては、「出産のすばらしさを強く感じた」や「出産がこんなに感動を与えるものだとは思わなかった」などがあげられていた。

「自分の将来」では、将来の自分をだぶらせて感じたことについて述べており、具体的な記述内容としては、「自分も子供を産んでみたいと思うが分娩中の苦しみをみているとどうかと思った」や「絶対に自分も幸せに妊娠、分娩したい」などがあげられていた。

3. 産婦を受け持ち看護を実践して考えたこと
産婦を受け持ち看護を実践して考えたことの有効回答数60人の自由記述件数は63件であった。

自由記述件数63件の記述内容の分類とその具体的な記述内容を表2に示した。

前述2.と同様に記述内容を意味内容毎にまとめると「分娩室の雰囲気」「産婦の姿」「夫の立ち会い状況」「産婦への同情」「産婦からの学び」「分娩第2、3期以後の援助」「産婦の分娩後の変

化」の7の項目となった。

最も多かったのは「分娩室の雰囲気」が14件(22.2%)、次に「産婦の姿」が11件(17.5%)、「夫の立ち会い状況」が10件(15.8%)、「産婦への同情」が9件(14.3%)、「産婦からの学び」が8件(12.7%)、「分娩第2、3期以後の援助」が7件(11.1%)、「産婦の分娩後の変化」が4件(6.4%)であった。

カテゴリ毎の具体的な主な記載内容を以下に述べる。

「分娩室の雰囲気」では、分娩室内での産婦をとりまく環境に着目して考えたことを述べており、具体的な記述内容としては、「分娩室の緊迫した雰囲気など、じかに感じる事ができた」や「照明、BGMなど、自分の家にいるような雰囲気があった」や「分娩室は落ち着いた雰囲気があり、産婦にとっても安心して分娩できる環境であると思った」などがあげられていた。

「産婦の姿」では、産婦が努力している姿をみて考えたことを述べており、具体的な記述内容としては、「一生懸命に兄を産もうとしている姿は感動的だった」や「一生懸命りきんでいる姿をみて生命の誕生は大がかりだと思った」や「どんなに苦しいときでも産婦は信頼できる人を探していると思った」などがあげられていた。

「夫の立ち会い状況」では、全例ではないが、産婦のそばに夫が付き添うことの意味やその姿をみて考えたことを述べており、その具体的な記述内容としては、「夫の励ましはとても心強いのではないかと思った」や「夫と一緒に呼吸法を行って感動した」や「立ち会った夫が生まれたての兄を愛おしそうにみている姿が印象的だった」などがあげられていた。

「産婦への同情」では、学生が産婦に共感していたことを述べており、その具体的な記述内容としては、「産婦が苦しんでいるのを見るのがとてもつらく、私まで苦しくなってきた」や「陣痛が痛そうで気の毒だった」や「間歇時もこれからくる陣痛の前の静けさのようなものでありかわいそうだった」などがあげられていた。

「産婦からの学び」では、産婦の看護を実践しわかったことについて述べており、その具体的な記述内容としては、「妊婦はこのように苦しんで出産することがわかった」や「分娩の種類によって産婦の状態にも違いがあるということがわかった」や「産婦の表情から分娩経過を知った」など

があげられていた。

「分娩第2、3期以後の援助」では、産婦の看護は褥婦の看護へと継続していくという視点から述べており、その具体的な記述内容としては、「産婦の看護は第2期までではなく第3期、4期と継続していくものだ」や「分娩による疲労が強く、だから休息をどのようにとり疲労を解決していくかを考えていく必要がある」などがあげられ

ていた。

「産婦の分娩後の変化」では、分娩前後の産婦の訴えや表情の変化について述べており、その具体的な記述内容としては、「もうダメと叫んでいたが、苦勞して産んでよかったと言っていた言葉が印象的」や「娩出後児の泣き声が聞こえたときの、母親の安心したようなホッとした表情が印象的だった」などがあげられていた。

表2 産婦を受け持ち看護を実践して考えたこと

n=63

項目	件数(%)	具体的な記述内容
1. 分娩室の雰囲気	14 (22.2)	「分娩室の緊迫した雰囲気など、じかに感じる事ができた」 「照明、BGM など、自分の家にいるような雰囲気があった」 「分娩室は落ち着いた雰囲気があり、産婦にとっても安心して分娩できる環境であると思った」 「胎児娩出までの緊迫した状況と娩出後のホッとしたような和やかな雰囲気の違いを感じた」など
2. 産婦の姿	11 (17.5)	「一生懸命に児を産もうとしている姿は感動的だった」 「一生懸命りきんでいる姿を見て生命の誕生は大がかりだと思った」 「どんなに苦しいときでも産婦は信頼できる人を探していると思った」 「産婦は一生懸命いきみ新しい生命を生みだそうとがんばっていた」など
3. 夫の立ち会い状況	10 (15.8)	「夫の励ましはとても心強いのではないかと思った」 「夫と一緒に呼吸法を行っていて感動した」 「胎盤娩出や会陰縫合は夫にもみてもらった方が、女性の体の生理がわかってよいのではと思った」 「立ち会った夫が生まれたての児を愛おしそうにみている姿が印象的だった」
4. 産婦への同情	9 (14.3)	「産婦が苦しんでいるのを見るのがとてもつらく、私まで苦しくなってきた」 「分娩時の苦しそうな産婦の姿が忘れられない」 「陣痛が痛そうで気の毒だった」 「間歇時もこれからくる陣痛の前の静けさのようなものでありかわいそうだった」
5. 産婦からの学び	8 (12.7)	「妊婦はこのような苦しんで出産することがわかった」 「分娩の種類によって産婦の状態にも違いがあるということがわかった」 「産婦の表情から分娩経過を知った」 「産婦は力強く声をかけて励ましてくれる人を求めていると学んだ」など
6. 分娩第2、3期以後の援助	7 (11.1)	「第2期の感動や喜びもつかの間であり、すぐに第3期に移るので忙しいと感じた」 「産婦の看護は第2期までではなく第3期、4期と継続していくものだ」 「硬膜外麻酔の影響で下肢の感覚がなくなっていたので、足浴などのお湯の温度には注意しなければならない」 「分娩による疲労が強く、だから休息をどのようにとり疲労を解決していくかを考えていく必要があると思った」など
7. 産婦の分娩後の変化	4 (6.4)	「もうダメと叫んでいたが、苦勞して産んでよかったと言っていた言葉が印象的」 「娩出後児の泣き声が聞こえたときの、母親の安心したようなホッとした表情が印象的だった」など

(単位：件数、複数回答)

4. 母と新生児の様子をみて感じたこと

「母と新生児の様子をみて感じたこと」の有効回答数60人の自由記述件数は62件であった。

自由記述件数62件の記述内容の分類とその具体的な記述内容を表3に示した。

記述内容を意味内容毎にまとめると「感動」「母児接触の意味」「母親の変化」「母と子のきずな」「母と子のつながり」の5項目であった。

最も多かったのは「感動」が17件(27.4%)、同じく「母児接触の意味」が17件(27.4%)、次いで「母親の変化」が16件(25.8%)、「母と子のきずな」が8件(12.9%)、「母と子のつながり」が4件(6.5%)であった。

カテゴリ毎の具体的な主な内容は以下のように記述されている。

「感動」では、分娩直後の母児対面時や分娩

第4期の対面時の母児の表情、態度を密に観察して感じたことを述べており、その具体的な記述内容としては「出産直後の最初の児と母の対面の瞬間がとても感動的だった」や「児が目を大きくあけてお母さんに抱かれている姿を見たらとても感動した」や「母と児の姿を見ていると、私もとても喜ばしい気持ちで一杯になった」などである。「母児接触の意味」では、母児対面がその後の育児、また母親の気持ちに与える影響などについて感じたことが述べられており、その具体的内容には「早期の母児接触が、その後の母親の育児意欲に大きな影響を与えるのではないかと思った」や「出産後の児との対面が母によっては何よりの精神的安寧につながると思った」や「母児対面児の感動の一瞬が母性意識を高め、今後の母子関係に影響してくるのだと感じた」などがあげられている。

「母親の変化」では、母児対面時の母親の微妙な表情の変化を逃さずとらえており、その具体的な記述内容としては「分娩直後の対面時、笑顔で

とてもうれしそうに名前を呼んでいた」、「児と対面した瞬間、今までの姿とは想像もつかないほど、やさしくやわらいだ笑顔に変わった」や「児娩出後、本当に安心したようなさわやかな笑顔をしていてとてもいい表情だった」などがあげられていた。

「母と子のきずな」では、「母と子にきずな」を感じたことを述べており、その具体的な記述内容としては、「母親は産もうとし、児は生まれようとする、この双方のきずなの強さというものを感じた」や「母と子は生まれた瞬間から、もう強い絆があるように感じた」や「母と児の目と目があり、何も語らないのに2人の間に何かがあるように感じ、これがきずなのかと思った」などがあげられていた。

「母と子のつながり」では、「母とのつながりが、臍帯を通して見えた気がして鳥肌が立った」や「この瞬間のために双方ががんばってきたのだという母子間のつながりの強さを感じた」などがあげられていた。

表3 母と新生児の様子をみて感じたことは何か

n=62

項目	件数(%)	具体的な記述内容
1. 感動	17 (27.4)	「出産直後の最初の児と母の対面の瞬間がとても感動的だった」 「娩出後の対面時、母親の表情がとてもうれしそうに感動的だった」 「児が目を大きくあけてお母さんに抱かれている姿を見たらとても感動した」 「母と児の姿を見ていると、私もとても喜ばしい気持ちで一杯になった」など
2. 母児接触の意義	17 (27.4)	「早期の母児接触が、その後の母親の育児意欲に大きな影響を与えるのではないかと思った」 「出産後の児との対面が母によっては何よりの精神的安寧につながると思った」 「自分の目で見た瞬間全ての苦痛が消失し、苦痛の大部分が喜び、満足感に変わるのではないかと思った」 「娩出後の対面時、どちらも安心しきった状態だったと感じた」 「母児対面児の感動の一瞬が母性意識を高め、今後の母子関係に影響してくるのだと感じた」など
3. 母親の変化	16 (25.8)	「母親の表情がとてもほほえましかった」 「分娩直後の対面時、笑顔でとてもうれしそうに名前を呼んでいた」 「児と対面した瞬間、今までの姿とは想像もつかないほど、やさしくやわらいだ笑顔に変わった」 「児娩出後、母が児を抱きかかえた時の笑顔が忘れられない」 「児娩出後、本当に安心したようなさわやかな笑顔をしてとてもいい表情だった」など
4. 母と子のきずな	8 (12.9)	「母親は産もうとし、児は生まれようとする、この双方のきずなの強さというものを感じた」 「母と子は生まれた瞬間から、もう強い絆があるように感じた」 「母と児の目と目があり、何も語らないのに2人の間に何かがあるように感じ、これがきずなのかと思った」など
5. 母と子のつながり	4 (6.5)	「母と子のつながりが、臍帯を通して見えた気がして鳥肌が立った」 「この瞬間のために双方ががんばってきたのだという母子間のつながりの強さを感じた」など

(単位：件数、複数回答)

V. 考察

1. 感動とは

分娩を見学し最も印象に強く感じたことについては「感動」が40件（21.5%）と最も多かった。この「感動」では分娩という生理的現象に、学生がいかに驚き、感動したかについて述べられていた。「産婦の看護」について学内では既に学習しているが、初めての分娩見学では、驚きと感動が渦巻き、生命の誕生の素晴らしさに目を見張ったことが、レポートから読み取ることができた。

広田¹⁾は「分娩見学はさまざまな感性を育む場である」と述べている。本結果からも明らかなように、学生は分娩を見学することでさまざまな思いを抱いていた。小さな生命の誕生ではあるが、これによって生命の尊厳や自分自身が今ここに存在することの意味を十分に感じ取ることができている。この思いをレポートに記述する際に振り返ることは、「産婦の看護とは」について思考し学習を深めることができ、また学生自身の周辺への思いと生命の尊さを感じられるなどの感性を磨くことになると思う。

伊橋ら²⁾は学生の感情を大切にすることについて述べているが、筆者らも同様に、このような学生が抱いている思いを大切にしながら、学習した内容を振り返られるように指導していきたいと考える。

また、学習指導を通して、学習への興味・関心を「持たせる」こと、「持つ」ように育てることは、母性実習（学習）目標達成の点から重要であると考えられる。

久川ら³⁾も母性看護学の臨床実習体験の効果として「満足体験は学習の効果を促進する、また満足体験の主な要因には分娩の感動があげられていた」と述べている。筆者らの研究でも母性実習目標の達成度が高い第一の理由は「分娩見学」の体験であることはすでに述べているが、実際の分娩見学は学内学習では得られない感動・体験（その場）を味わうことができるからだと考える。

分娩見学は、個の深層の現実にあふれ、相互行為のなかで分娩第1期から褥婦の看護へと有機的に結びつけるための思考プロセスにも有意義であるということは先に述べている⁴⁾が、分娩見学をできないときは、「産褥期の看護」の母性実習の際に見学ができるようにし、褥婦、新生児の看護へと有機的に結びつけられる母性実習指導をしなければならぬと考える。

2. 産婦の看護実践を通しての学び

学生は看護実践を通して、本、ビデオでは学習できないことを学び、自分と親との関係、母親にとって新生児がいかに大切な存在であるか、さらに、新生児をとりまくニュー・ファミリーへの思いも含めて看護の視点を拡大・発展させることを学んでいた。

産婦を受け持ち、看護を実践して考えたことでは「分娩室の雰囲気」が14件（22.2%）が最も多かった。産婦をとりまく環境に着目し緊迫した雰囲気、家庭的雰囲気などをじかに感じ取り、その環境が産婦に与える影響などについて学習できていた。その緊迫した緊張感に満ちみちた分娩室も、元気な新生児の産声で一瞬に緊張が和らぎ、何ともいえない安堵感が広がる状況から、分娩時の「分娩室の独特の雰囲気」を感じ、「新生児誕生」を産婦・医療関係者と共に待ち望む「心境」をも学び得ている。

学生自身は分娩をするわけではないが、産婦の看護、特に産痛緩和の援助を通して対象の理解を深めている。また、産婦の看護を通して分娩経過の実際が理解でき、学習効果が大きくなると考える。

対象者の状況を妊娠、分娩、産褥という一連の経過について、継続して観察できるような母性実習が必要である。しかし、現状の学生の母性実習時間内では無理がある。定められた実習期間のなかで母性実習の行動目標を明確にすることはとても重要なことである。その行動目標を達成するためにも、分娩期の産婦に看護援助をさせるには、教員が「何を・いつ・どのようにするか」を具体的にアドバイスすることが必要であると考えられる。そして分断された場面（トピックス）においては、学生が即、看護を実践することは困難である。そのため教員が手本を示し、看護を展開してみせ、看護のモデリングになることも必要である。

母性実習の場合、看護実践を通して対象者が自身の身体変化の確認ができ、これらの変化を学生が確実に目でとらえ（観察）、それは学習の効果として満足感と学習のプロセスであると認識できる。さらに、それは学習の意欲を駆り立てることになると考える。

このような母性実習方法は、学生自身が自分でもやれそうだ、という思いになれるような学習の方向付けを行い、意欲をもたせるように関わることである。そして具体的な結果を提示して学生が

行ったことへの評価を与えることが学習のストラテジーとして必要な方法である。したがって、母性実習指導では、学生の能力を引き出し、または学生が自己の能力を発揮できるように、学んだ知識と技術を統合し、看護実践ができるような方法で関わるのが重要である。そのためには教員が学生に「密」に関わることで、学生はより「個々に応じた指導」を受けることができた実感と、「実践できた」、「目標に到達できた」等の満足感を得ることになるのである。それゆえに学生個々のレベルに応じた指導計画を立てて、指導を展開していくことが大切である。

しかし、母性実習経過中に産婦の受け持ち、分娩の見学、褥婦の看護過程の展開と継続的な学習ができず、はじめに分娩第4期の看護実践をしてから分娩第1期の看護実践をしなければならない場合もある。今後の課題として以上の検討内容から、母性実習の学習効果がより上昇するには、それらを一連の経過として結びつけられるような母性実習の方法を見出す必要がある。

3. 母子相互作用の視点から

「母と新生児の様子をみて感じたこと」は何かでは、「感動」が17件（27.4%）と「母児接触の意義」が17件（27.4%）が多かった。

学生は母性実習のなかで、あるひとつの生理的経過である分娩を見学している。分娩見学は生命を考える機会となり感動も大きく、自分の存在、家族に目を向ける機会となっている。なかでも、母親が新生児と対面しお互いの表情や母親の語りかける言葉から、母子相互作用について考える機会となっている。母子相互作用については学内でも学習しているが、実際の対面場面から学びを深めていることがうかがえる。

学生は、産婦が感じている苦痛をあたかも学生自身が感じているような体験をしながら看護を実践し、新生児の娩出に感動し、そして母児対面時にもその瞬間に感動している。母親の表情を観察し、まるで学生自身が分娩したかのような喜ばしい気持ちになったりしている。そのような感動の一瞬が学生自身の母性意識を高めていると考える。

「母性意識は、乳幼児のニードを正確に読みとることのできる敏感な母親との、乳幼児期における関係のなかで信頼を育て、学童期や思春期において家族や仲間（友人）との関係のなかで『他を慈しむ』経験を重ねる一方、母親との関係のなかで、『母親の心』や行動を観察して、習得してい

く、という成育過程のなかで形成されるものである」⁵⁾が、学生は、今まさに母性意識を育み、学習（外的刺激）しながら形成しつつあるのである。そのようななかで、他人とはいえ母児の様子を観察し、思考し、学生自身とその母親や家族との関係を考えることは非常に意義があると考えられる。

以上のことから、臨床実習のもつ意義・大切さを再確認できた。そして、分娩時のVTRによる学内学習では味わうことのできない感動を母性実習では充分味わい、母親となることの自分の存在について考える機会ともなっている。このような学習の機会を、今後も継続していきたい。

本研究の限界は、調査対象の人数が少ないこと、また対象者の主観的データを分析対象としたため一般化できない、などがあげられる。

VI. 結論

今回の調査により以下のような結論が得られた。

1. 「分娩見学」をすることによって、分娩前の妊娠経過と分娩後の産褥経過（新生児含む）を有機的に結びつけることができ、「母性実習」の成果がより大きくなる。
2. 産婦の看護、特に産痛緩和の援助を通して、産婦と一体となるような母性実習体験をすることで対象の理解も深まり、学習効果が拡大する。
3. 学生は「母児対面」の場に居合わせることで学生自身の母性意識を高める。

引用文献

- 1) 広田喜美子：分娩実習における学生の情意領域に関する研究（第1報），第18回日本看護学会（看護教育）集録，p113，1987.
- 2) 伊橋智江子，菅谷千恵子，河合節子，久保木三喜子，穴澤加代子，宮内栄子，石田清美，佐久間恵美子，渡辺千恵子：母性看護実習での分娩見学における学習内容の検討，旭中央病院医報，21巻1号，p17～19，1999.
- 3) 久川洋子，和田サヨ子：母性看護学実習の“ふりかえり”面接による学生の満足体験と喪失体験の分析（その1），看護学教育学会，第3巻2号，p64～65，1993.
- 4) 志賀くに子，伊藤榮子：母性看護学実習における自己評価の分析（第1報），日本赤十字秋田短期大学紀要，第3号，p35～40，1998.
- 5) 新道幸恵，和田サヨ子：母性の心理社会的側面と

看護ケア, p101, 医学書院, 1995.

参考文献

- 布施明美,富所京美:母性看護学実習における学生の
学び,神奈川県立平塚看護専門学校紀要, vol.5, p39
~45, 1997.
- 東洋, 梅本堯夫, 芝祐順, 梶田毅一編集:現代教育評
価辞典, 金子書房, 1996.
- 深川ゆかり:感性を育む分娩時の看護, 看護教育, 第
27巻3号, p147~150, 1986.
- 乙部陵子, 下河原昭子, 小野美砂子:母性看護実習に
おける実習指導のあり方の検討ー分娩の立ち合いか
らの学びを分析してー, 第28回日本看護学会集録
(母性看護), p39~41, 1997.
- レバドトニエ, マーサAトンプソン:看護学教育のス
トラテジー, 医学書院, 1998.
- 志賀くに子, 伊藤榮子:母性看護学実習における学生
の満足度, 日本赤十字秋田短期大学紀要, 第4号,
p37~43, 1999.
- 杉本みど里:看護教育学, 医学書院, 1999.
- 玉里八重子:母性看護学実習の自己評価にみる実習状
況と学習効果について, 京都市立看護短期大学紀要,
第24号, p25~33, 1999.